

牧者のいない教会に希望の光を 前編

全国に約8千あるプロテスタント教会のうち、牧師のいない教会は300、兼牧も含めるとその数は約1千教会にのぼり、比率にして全体のおよそ13%を占める。日本全体の教勢の減衰傾向が指摘されるのにもない、無牧教会、ひいては教会閉鎖の件数増加が不安視される中、お茶の水クリスチャン・センター（村上宣道理事長）は、牧師を探している教会と奉仕の場を求めている教職者をつなぐ「O C C無牧ミニストリーズ」を展開している。そのコーディネーターを務めるのは栗崎路（あゆみ）氏。東京基督教大学で修士論文「無牧の教会に対するサポートシステムの構築」により学位を取得し、現在幸町キリスト教会（茨城県筑西市）で奉仕する栗崎氏に、このミニストリーが必要とされる背景、展望について聞いた。2回にわたって掲載する。

—この働きは端的に言って、牧師を探している教会と奉仕教会を探している牧師をそれぞれリスト化し、結び合わせる、言わば“結婚紹介”のようなマッチングシステムだと思われます。このようなシステム構築に取り組まれた理由は何ですか。

無牧教会が増加する原因としては、「高齢化・後継者不足」、「地域格差」、「情報不足」が考えられます。この前二者に関しては、日本全体、キリスト教会全体が直面している問題であり、抜本的な解決は一朝一夕にもたらされるものではないでしょう。しかし「情報不足」に関して言えば、具体的に取ることはあると思います。

実際に教会が牧師を探そうとする時には、任命制の教会は別として、何らかの方法で可能性のある教職者の情報を集めようとするでしょう。今在任している牧師がいる場合にはその人を通して、教団に属している教会ならその教団に、他教会と交流があるならその牧師を通じてなどが考えられます。教団によっては、自身の団体の中に無牧教会がどれだけあり、派遣可能な働き人がどれだけいるかを随時把握し、全体を調整するシステムを持っているところもありますし、システム化はされていなくても、教団内の緩やかなつながりが各教会に委ねられた牧師招聘を円滑に実現している事例もあります。

問題となるのは、教団に属していても牧師招聘を全く教会独自で行わなければならない場合、そしてそれ以上に、そもそも所属する団体を持たない単立教会、中でも地方にあって地域の他教会ともあまり交わりのない教会です。それらの教会は、多くの場合、赴任先を探している牧師がどれくらいいるか、どうすればコンタクトを取れるのか、といった情報を持っていません。後継者不足と言っても、現在全国には教会数を超える1万人くらいの教職者がいますし、神学校も毎年相当数の卒業生を送り出しています。そのような貴重な賜物、人材の活用という点からも、情報提供により何かできるのではないかと考えました。

—具体的にどのような情報を提供するのですか

登録していただく牧師には、基本的な情報に加えて、卒業した神学校、奉仕教会の履歴、ご自身が取り組んできたこと、賜物、重荷、そしてどのような教会を希望するか、地域性や神学的背景などを書いていただきます。これはもちろん、教会がどのような牧師を希望するのかに基づいて判断するためで、教会が登録する場合には、無牧になった原因、教会の特徴、どのような牧師を希望のかなどを書いてもらいま

す。あとは基本的に当事者同士で話し合っていて、ということになります。ただ、実際の牧師招聘に関して言えば、それだけでは不十分かもしれません。無牧教会の中には、そもそもどのようにして牧師を招聘するか、知識も経験もノウハウも持っていないところが少なからずあるのです。

ある牧師は、2年間近く無牧を経験した単立教会に赴任しましたが、その2年間教会は「ただ祈るだけ」だったようです。具体的になすすべを知らなかった、とも言えるでしょう。ある出会いからその教会を紹介され、これといった審査や面接もなく、ただただ歓迎されて迎え入れられたそうですが、そのことが逆に不安だったと、その牧師は言っていました。「とにかく牧師が来てくれればいい」という教会も確かにあるのです。

—だとすると、招聘後に問題が起きるケースもあるのではないのでしょうか。

学位論文のために多くの牧師に話を聞きましたが、「こんなはずではなかった」という類いの声はよく聞きました。無牧の単立教会の傾向として、無牧の期間が長くなるほど、群れの指向性が内向きになる、ということはあるかと思えます。もちろん、全ての教会ではないですが。前任牧師のやり方、教えが絶対であったり、その教会の文化伝統が異常に強かったり、内部の人間関係が硬直化して外部の人間を受け入れようとしなかったり。その場合、「外部の人間」とは、新しく来た牧師さえも含むことがあるのです。ある牧師は、受付台の位置を動かすことさえできなかったそうです。台所のやかんの位置を動かして、烈火のごとく怒られた方もいました。「私はこの教会の嫁なんです」と言った女性牧師もいました。教理的な違いが問題になる場合もあります。「前の先生はそうは言わなかった」。前任の牧師も後任の牧師も間違ったことを教えていたわけではないはずですが。しかし、一人の牧師によって長年教えられてきた教会では、教理教派の違いの存在を知らなかったり、その違いを受け入れられなかったりする場合があります。

—そういうことが起こらないために、どうすればいいのでしょうか。

必ず何回か事前に来てもらって説教してもらって、教会のニーズと賜物があっているか判断する、などを教会には勧めます。でも最終的には当事者同士で話し合っていて決めていただく以外にありません。実際招聘した結果がどうなるかはわかりませんが、教会と牧師の双方が努力しなければならないのは無論です。私たちにできるのは、出会いの場を提供することまでです。ですから、牧師さえ見つければ問題解決、ということではないのです。(つづく)

牧者のいない教会に希望の光を 後編

日本全体の教勢の減衰傾向が指摘されるのにもない、無牧教会、ひいては教会閉鎖の件数増加が不安視される中、お茶の水クリスチャンセンター（村上宣道理事長）は、牧師を探している教会と奉仕の場を求めている教職者をつなぐ「OCC無牧ミニストリーズ」を展開している。言わば、教会と牧師を結びつける「マッチングシステム」だ。そのコーディネーターを務めるのは栗崎路（あゆみ）氏。東京基督教大学で修士論文「無牧の教会に対するサポートシステムの構築」により学位を取得し、現在幸町キリスト教会（茨城県筑西市）で奉仕する栗崎氏だが、このミニストリーは単なる「牧師紹介」ではないと言う。この働きが必要とされる背景、展望を聞いた。

<https://muboku.org>

—「牧師さえ見つければ問題解決、ということではない」とは、どういうことですか。

牧師のいない教会の問題は、説教者がいないことで、礼拝が持てない、群れが養われない、ということだと思いますが、牧師を立てるということは、その問題を解決する一つの手段です。たとえ牧師が与えられても、その教会できちんと「牧会」できなければ、問題は解決しません。そのためには、牧師も迎える教会も、お互いに理解し努力する必要が当然あるだろうと思います。牧師を求めている教会の多くは、小さな規模の教会です。単立であるならば、開拓から始めた前の牧師の影響が強く信徒に残っており、同じような牧師を求め、それ故に、場合によっては牧師という職務を正しく理解していない場合もあります。

「前の牧師と違う」ということで受け入れられないならば、誰が行っても牧会は困難でしょうし、残念ながらそういう教会もあるのです。ある牧師は、「一大家族で良いから、牧師と信徒の架け橋になってくれる人がいれば」と言っていました。

一方で、**牧師がいなくなっても信徒リーダーがいれば教会は存続すると思われています**。私が導かれた幸町キリスト教会は、2年間無牧でした。前の牧師が辞任した後は、二大家族だけで祈り会をしていましたが、重荷を与えられた信徒が説教をするようになり、本当に手探りの状態だったようですが、礼拝が守られました。しばらくしてアメリカの教会とつながりができ、その牧師が教材や説教を送ってくれるようになり、年に何回かはスカイプでメッセージもしてくれたようです。**自分たちを覚えてくれている牧師がいて、祈ってくれて、年に一回でも二回でも訪問してくれれば、信徒はちゃんと養われていきます**。スカイプでのメッセージだったとしても、全然知らない牧師の説教をネットで見るのとは違うでしょう。私が赴任したときも、この教会の信徒は霊的にそれほど停滞していなかった。伝道への意欲もありました。**無牧教会で調査をすると、多くの場合、信仰的には落ち込んでいるものなのですが**。

—それでも、先生の教会の信徒の方は、牧師を欲したということですね。

それは当然でしょう。教会は牧師を求めています。同じように奉仕の場を探している教職者もいます。それならば何とかして両者を結び合わせる方策を考えるべきです。

—教会はそうとして、教職者はそれほどいるものでしょうか。

私自身、今の教会に導かれはしましたが、神学校にいて無牧教会に遣わされたいと願っていた時には、自分で奉仕先の教会を探す術を知りませんでした。献身者の中には奉仕先が見つからなくて、神学校を卒業しても牧会の現場に出ることのできない人もいます。ユースミニストリーの盛んな教会からは献身者が多く出て神学校で学びますが、卒業しても自分の教会で有給のポストが無くて、週日は働きながら週末だけ教会のボランティアスタッフをしている人もいます。地方の小さな教会から献身者が起こされても、母教会に現在牧師がいるならば、卒業して帰ってきても、教会が二人の牧師を支える余裕はないということもあります。それに、私もアメリカの神学校にいましたけれど、海外で学んだ者は結構日本での働き場所がないんです。そう考えると、**人材不足と言いながら、実は宣教の現場でもっと働きたいと思っている人はたくさんいて、そんな人材を生かしていないのではないか、と思われ**ます。有為な人材を生かすにはどうしたらいいかと考えたのが、このシステムです。

一人為的なシステムということで、反対意見が聞こえてきそうです。

神様が教会を導き、働き人ひとりひとりの人生に豊かにご介入くださるということは当然なことです。しかし同時にその信仰は私たちが知恵を用いることを否定するものではないでしょうし、実際に牧師派遣・招聘のシステムの整った教団で行われているのは、このようなマッチングでしょう。そのシステムの中にも神様の介入はあるはずです。

一あくまでも無牧教会の支援ということと言うならば、経済的に牧師を招聘できないケースは少なくないのでは。

特に地方では、一教会一牧師はこれから一層難しくなるでしょう。先ほども触れましたが、信徒牧会者をもっと育てる必要があります。そして、特に単立の教会は、他の教会とつながりを持つべきです。自分の教会に牧師がいなくても、いつも覚えて祈ってくれる牧師がいる。その牧師の説教をネットにつなげば毎週見ることだってできるはずです。ネットならばどれだけ遠方にいる牧師ともつながります。実際、私の教会を支えてくれたのはアメリカの教会の牧師でした。高齢者ばかりの地方の教会ではそんなことはできない、と言うかもしれませんが、その程度のことを技術的に行える人間は都市部の教会にはいくらでもあります。

都市部の教会はもっと地方の教会のことを具体的に考え、支援すべきです。地方の小さな教会が、自分の教会の中で全ての問題を解決しようとしたら、とても無理でしょう。牧師だけでなく、牧師を手始めに、いろいろな人材の共有を考えるべきではないでしょうか。そのために都市部の教会にできることがあるはずです。このミニストリーが、地方と都市の教会をつなぐ働きにもなっていくことを願っています。